

【20】

氏名 間 阪 孝 文

学 位 の 種 類 医 学 博 士

学 位 授 与 番 号 甲 第 136 号

学 位 授 与 の 日 付 昭和39年 3 月31日

学 位 授 与 の 要 件 医学研究科内科系内科学専攻
(学位規則第5条第1項該当)

学 位 論 文 題 目 肝疾患の免疫血清学的研究

論 文 審 査 委 員 教授 小坂 淳夫 教授 平 木 潔 教授 村 上 栄

学 位 論 文 内 容 要 旨

肝疾患，とくにウイルス性肝炎の慢性化過程において自己免疫機序の関与の一端を解明する目的で主として肝炎，肝硬変で検討した。

第一篇において，L.E.細胞現象及びその他核貪食現象の出現を検討し，先ずL.E.細胞陽性例につき lupoid hepatitis との関係を論じた後，その出現と病像の進行状態との関係を検討し，必ずしも平行しないことをみとめ，抗肝抗体との関係は不明であったが，血清 $\beta 2$ M-Globulin の沈降線の著明な出現傾向をみとめている。

また，L.E.細胞現象陰性群で偽L.E.細胞陽性例を検討すると，その持続出現例は血清トランスアミナーゼの悪化，変動を示す例が多いことをみとめ肝炎慢性化との関係が重視された。

第二篇においては，肝疾患患者の血清蛋白の分析を免疫電気泳動で行うと共に $\beta 2$ M-Globulin，及び抗肝抗体の出現状況と臨床像を対比検討した。 $\beta 2$ M-Globulin 増強群は増強しない群に比し臨床経過，肝組織像，血清トランスアミナーゼ，血清蛋白像，血液像において悪化をしめし，抗肝抗体出現を伴う群は更にこの傾向が著明となったが両者の出現の関連性は明らかでなく，摘脾 Steroid 療法による両者への影響もみとめないことを明かにした。

(第一篇，第二篇共に岡山医学会雑誌)
第75巻第11，12号に掲載予定。

論文審査の結果の要旨

間坂孝文提出の「肝疾患の免疫血清学的研究」に関する学位論文につき審査した結果の要旨は、次の通りである。

先ず肝疾患例につき L.E. 細胞現象および偽 L.E. 細胞ロゼツテ形成の陽性率を検討し、L.E. 細胞現象陽性例を 4 例を発見し、それらの臨床を詳細に検討すると共に、Lupoide 肝炎との関係を考察すると共に、偽 L.E. 細胞の陽性率と、経過を追っての出現状態を検討した結果、これらの陽性は病変の進行性と関係があることが分った。

次に血清 β_2 M-Globulin は急性肝炎の回復期より既に高率に証明したが、慢性化がすすむにつれてその率を増加し、さらに抗肝抗体の出現を伴う例では慢性化、悪化の傾向がつよいこと、これらの関係を肝組織像、血清トランスアミナーゼ値、他の血清蛋白像、血液像においても詳細に検討している。

以上の通り本論文は新しい知見に富み、学術上有益であり、著者は医学博士の学位を授与せられるべき学力を有すると認める。